

華・絵・器：華林の芸術展

さいりゅうか
彩流華と古流いけばな作品集 I



加賀と倭
やまと

2023
11

海のカ、山のカ

2024
11

華林苑

文・解説 華林

てりは もっかどこんすい
照葉と木火土金水の世界

ミロク信仰と聖徳太子 — 金の章



ミロク面(金神) | 青銅・銀被せ / 華林
華林が制作した陶作品を3Dスキャン、
鋳物で拡大制作した
もの。中空になっている。

聖徳太子信仰の根底にあるのはミロク信仰といわれます。
ミロク神は陰陽五行の観点からは「金」の性格をそなえています。そしてア
ジアの弥勒信仰はとまどうほど多彩な姿をとってあらわれます。多くの人が、
自分に馴染みがあるミロクこそが本当のミロクと考えるのは当然のことです
が、一方ですべてに変身しうる、すべてを包含するモノこそがミロクである
もいえます。すなわち、それは五行の「金」の意味でもあるのです。
上のミロクII金神面は中空になっています。すべてを包含するものは、じつ
は数字では0(ゼロ)と同じ、色では「白」と同じであるというアジア古来の哲
学を具現化するものとなりました。



『月下太子図(聖徳太子)』
／華林
12頁の花との作品より

彩流華 劔(金)の華 / 椿一色
器 / 源氏香紋銅大砂鉢
華 / 東森久華

桃山時代から江戸初期の華やかな立花の流行のなかで、江戸時代の武家の重厚な美意識を反映して「なげ入れ」からさらに「生花(せいか)」が生まれました。それは当時確立していった「床の間」をおもな舞台とし、和歌に秀でた武家や文化人たちが当初の担い手として中心的な存在でした。その江戸における生花の筆頭として一世を風靡したのが古流の生花でした。



せいか
生花 万年青(おもと)一色 株分け(ニツ寄せ)
銅砂鉢 華 / 田中理紅



せいか
生花 イブキとツワブキ 株分け(ニツ寄せ)
塗り象嵌砂鉢、塗り巻絹型花台
華 / 荒木理芳



せいか
生花 つるうめもどき、まさき、椿
三重切(竹三重) 華 / 福村理燈世
三重切は山(高い山)を表現する伝統の花器です。



せいか
生花 十月桜 と 小菊 ニツ寄せ
手付きの籠、陶花器
華 / 高森理世

れいか
禮華

アジア古来の吉祥のかたち

扇に頭と尾が付いた形、あるいは孔雀(くじゃく)が羽根を広げた形はアジアでは強い吉祥の形と考えられてきました。禮華ではそのよ
うな姿に華を生けます。



禮華 椿一色 絵「大蛙図」たまみつ画
朱色三つ足陶器 華と花器／華林
華林苑玄関にて



禮華 椿 あすなる さんごみずき アルストロメリア
孔雀草 トルコ桔梗
陶花器…意匠-華林／制作-前田弥富 華／中村啓穂



禮華 ひむろすぎ あすなる 椿 さんごみずき
トルコ桔梗 けいとう スターチス 菊
陶花器…意匠-華林 華／橋本紫萌



右の頁とつづきの間となる場所の作品では、絵も彩流華も五行の木＝風を表現するものとなっています。木＝風は、五行のなかでも現実界に直接はたらきかける力とされます。

五行・木火土金水のなかで木は水の変化形で、右頁の左端の木(風)の華は水からやや変化した姿ですが、この頁ではさらに変化して大きく活動する姿となっています。

いわゆる五行の哲学は何次元にも変化するといった多重構造となっているのでなかなか表現しにくい部分がありますが、大きくとらえると右頁は全体で「太極」といった五行すべてを含む根源の姿を表現しており、この頁ではそのなかの「木＝風」を突出させています。

古来の「風神雷神」といったテーマにも、これによく似た「対になる二者」という性格を見いだすことができます。あるいは、胎蔵・金剛界の両界曼荼羅図もよく似た印象をあたえています。この展示では、この頁が「海の力」、右頁が「山の力」を象徴しています。

彩流華、椿一色 風(木)の華 華林

絵(額) 丕鯁図(陰) たまみつ画

器 陶器 花器と花台の制作・意匠 華林

華林苑のつづきの間にて

2024年11月 華林の芸術展「海の力、山の力」

和歌の根底にあるのは言葉の文化です。よく知られるように、和歌では言葉の発音が重視されました。

「白」はまた「申す」とも発音し、言葉を発声するという意味にもなります。

上の絵は近年注目をあびる北関東出土の、武家文化の原像といわれるハニワの一つを描いています。右のイラストはそれをやや具象的に表現したものです。

鈴をつけて「白す」、つまり言霊で神まつりをしていた姿と考えられ、武家文化の原像がここにみられるのです。

絵『七鈴の王の言霊 … 前方後円墳のハニワ』華林 額装/永嶋明 2025北國花展

右イラスト『祈りと言霊、七鈴の天冠の貴人』華林



「白」の世界

右頁の白菊の文化にもみられるように、「白」は特別な意味をもつ言葉でした。古来のアジアでは深い次元で白は数字の「0」と同義で、仏典で「空」と訳された言葉とも同義です。

それは「素」にも通じ、素もまた「しろ」とも発音します。それは「無」ではなくていわば「目に見えない根源の力」なのです。



対瓶の応用花直立型 白カラー 桐 しだれやなぎ 松 椿ほか 竹三重、二重、竹舟
 書「白」華林 華/山崎理恵 制作参加:新谷理紫 宮本紫澄 中川紫栄 川島美穂
 向出文穂 川本紫広 中村海穂 中村紫香 2025北國花展



もう一つの陰陽

芸術の原点は宗教、という言い方をされることがあります。しかし、宗教というよりも人間が根源的に持っている目に見えないものに対する「信仰」と言い換えたほうが理解しやすいでしょうか。太古の信仰心は、現代ではむしろ「芸術的感性」に置き換えるといいかもしれません。ある種の美意識が「神」そのものだったのでしょうか。

アジア古来の哲学は「陰と陽」が基本ですが、そのなかでも少しニュアンスが違う陰陽が天祖、つまり最初の祖霊である男神と女神です。

絵／「縄文男神」華林 彩流華・巳型 松一色 器／青銅の火鉢
離れの土蔵にて 手前は7個の桐の火鉢による、陽^{II}火を象徴するインスタレーション。
華／土橋白華



富山県富山市太田南町の刀尾(たちを)神社にて。古い礎石だろうか、上にかつてのものと思われる古びた瓦が置かれる。修験の時代をはるかに超えて、古い古い記憶が刻まれているかのような場所…。

ここは、かつて修験者の立山登拝の重要な起点だった。立山に祀られる神はイザナギ神、またはタチカラヲ、タチヲ天神といわれる。天祖である男神。



近辺には「水神社」が多いが、この境内にも水神社がある。「祖霊」は山に、水とともに祀られるのが本来の形と思われる。



縄文女神、縄文男神は縄文時代晩期から日本で尊崇され続ける陰陽の天祖を意味します。それはさまざまに姿を変えながら古代にはモノノベ系の文化に受けつがれ、さらには中世・近世の武家文化の原点になったと思われまます。東山文化に代表される中世の室町將軍家の同朋衆の文化、徳川家康の天台宗や浄土宗などの言霊の信仰の重用は、まさにその延長線上にあったと言えます。

絵／「縄文女神」華林 彩流華・巳型 椿一色 器／銅薄端大小重ね
母屋の土蔵にて 手前は6個の陶壺による、陰川水を象徴するインスタレーション。
華／上出鏡華 各絵は二月後の作品では若干加筆。(次頁)



右の頁の立山、富士山とならび日本三霊山とよばれてきた白山。おもに修験の世界などでは、富士山、立山の男神にたいしてここでは女神が祀られるとされる。天祖であるイザナミ神である。

白山の中腹、石徹白いとしろの白山神社ではイザナミ神の言い伝えとともに、宮川の清流が印象的だ。前出の熊野もイザナミ神とされ、修験の究極のコースでは熊野から白山へと歩む。左は同神社の「磐座」。



上/「熊野の奥の八大龍王ねこまた明神」 華林
下/ 熊野、玉置山 猫又の瀧 (奈良県/華林撮影)